

大陸中国における風水観念と民俗について

著者	渡邊 欣雄
雑誌名	日本文化の深層と沖縄
巻	12
ページ	25-44
発行年	1996-12-27
その他のタイトル	Tairiku Chugoku ni okeru fusui kannen to minzoku ni tsuite
URL	http://doi.org/10.15055/00005464

大陸中国における風水観念と民俗について

渡 邊 欣 雄

1. 大陸における風水調査研究の概要

一九九三年度一年間、わたくしは大陸中国での民俗調査と文献研究の機会に恵まれた。^① 研究テーマは二種あった。第一に大陸中国における民間風水の研究であり、第二に民俗宗教の研究であった。いずれのテーマも大陸中国に赴く前、じっさいには研究が困難ではないかという一抹の不安は隠せなかった。「改革開放政策」を謳う中国より、「社会主義」中国のイメージが強かったためである。しかしのちほど述べるように、この二種のテーマはわたくしの研究遂行のうえで、どんな文献を集めても、またどこに調査に赴いてもなんら支障はなかった。たしかに最近の中国は、わたくしの想像以上に大きな変貌を遂げていた。

ほぼ一年の間、わたくしがどんな調査過程を経て研究成果を得たのか。日本では研究成果だけが報告されることがいたって多く、

ましてや以前は禁止状態だった漢族の、しかも風水民俗や民俗宗教などというテーマで調査がどの程度可能か判明しない報告が少なくない。そこで本稿では、日本にいてはなかなか理解しがたい現地調査の成果を、話者との交渉を記述しながら紹介する形式で述べようと考えた。ここに紹介するのは、なかでも中国各地の「風水」に関する最近の一般的状況と、上海・福州・温州市内およびその周辺の農村各地で聞くことのできた風水民俗、すなわち民間風水知識の実態である。^②

本論に入る前にあらかじめ紹介しておく、わたくしが風水民俗の調査を行ったのは、ここに紹介しようとする地域以外にも、さまざまな地域に及んだ。すなわちまず北京付近では、その北郊にある承徳からはじまって北京市郊外の明十三陵・清西陵・清東陵であり、北京市内の四合院住宅だった。西に行っては西安（旧長安）・洛陽

の都城・庭園・墳墓などを観察し、湖南省に下っては、長沙西部にある劉少奇故居、毛沢東故居などを見学することができた。また湖北省では、岳陽市付近の農村、安陸市内の農村、武漢市郊外の農村、陵墓・墳墓を、そして安徽省でも黃山市内その他の各地の農村を訪れ、南京市にある明孝陵や中山陵その他についても観察することができた。また、東に向かつては浙江省の杭州・湖州・奉化・寧波の各農村をくわしく調査することができた。³さらに南に下って福建省にまで足をのびしたことは、後述する事例による。こうして中国各地のほとんどすべての農村において、風水民俗についての話を聞くことができたのである。

たとえば後述するように、上海近郊の農村では、かつて風水師だった二人の老人に会って終日風水の話聞くことができたし、波乱に富んだ人生経験を語ってもらった。また福建省のある農村や湖北省安陸市のある農村では、いま活躍中の專業風水師に会って、風水判断の实地指導まで受けたし、逆に風水術が秘伝だという理由で奥義の部分が開けなかったこともあった。風水知識が生きていればこそ、秘伝が秘伝として存在するのである。安徽省黃山市のある農村では、風水の方位判断に用いる羅盤を製作していた「写真1」。聞けば、いま中国各地から注文が殺到して、羅盤製作に忙しい毎日を送っているという。その他の農村にも風水知識を担う知識人がかならずいて、ある者は家伝の羅盤を用い、ある者は魯班尺を用いて、わたく



写真1：羅盤製作地として知られる黃山市付近の休寧県万全鎮にある羅盤店の1つ。宮崎順子氏提供。羅盤製作については、宮崎順子⁴に詳しい。

しのつたない質問に、ていねいに応じてくれた。中国において風水の知識というものは、それほど普及した民俗知識の一部なのである。一般の日本人には、かような中国のへ伝統ゝがなかなか理解できないだろうと思う。そこでまずは、現代大陸中国の風水に対する概括的な状況について紹介することにする。

2. 現代中国の「風水宝地」

北京東郊一二〇キロメートルあまり先にある清朝皇帝・皇后らの陵「清東陵」[図1]。陵域に進入するや、路上高く渡された横断幕が眼にはいる。「ようこそ風水宝地へ」。ほう、そんなこと書いていいのかな？ はじめはわたしも疑心暗鬼であった。かの文化大革命期はむろんのこと、そのあとも「風水」の二文字は旧習を象徴する迷信の一つとされ、用いることが禁止されていたからである。

西安東郊のあなたにある秦始皇帝陵。多量の兵馬俑が出土した地点も、その一〇キロメートルあなたにある。秦始皇帝陵は五〇六〇メートルほどの石榴畑の丘にみえたが、以前は兵馬俑出土地点を含めて二重の城壁をめぐるした巨大な墓だったという。陵の頂上に立つと、「風水宝地」と書かれた色鮮やかな看板が眼についた。その看板を背景にして写真を撮らせ、金儲けしようという業者の仕掛けだった。「風水宝地」という標語が金になるのだろうか。現代中国の変貌ぶりに、わたしはようやく気づきはじめた。「風水」は旧習どころか、観光地の現代ファッショに等しくなっていたのである。ずっと南に下って湖南省長沙市。長沙市から西方一〇〇キロメートルあまり行った農村地帯の韶山に、毛沢東故居がある「写真2」。中華人民共和国建国の父の生家にしては、まったく制限もなく自由に参観できる。毛家が用いていた農具も生活用品もそのまま展示してあって、まるで民俗博物館を参観している思いである。毛沢東故居

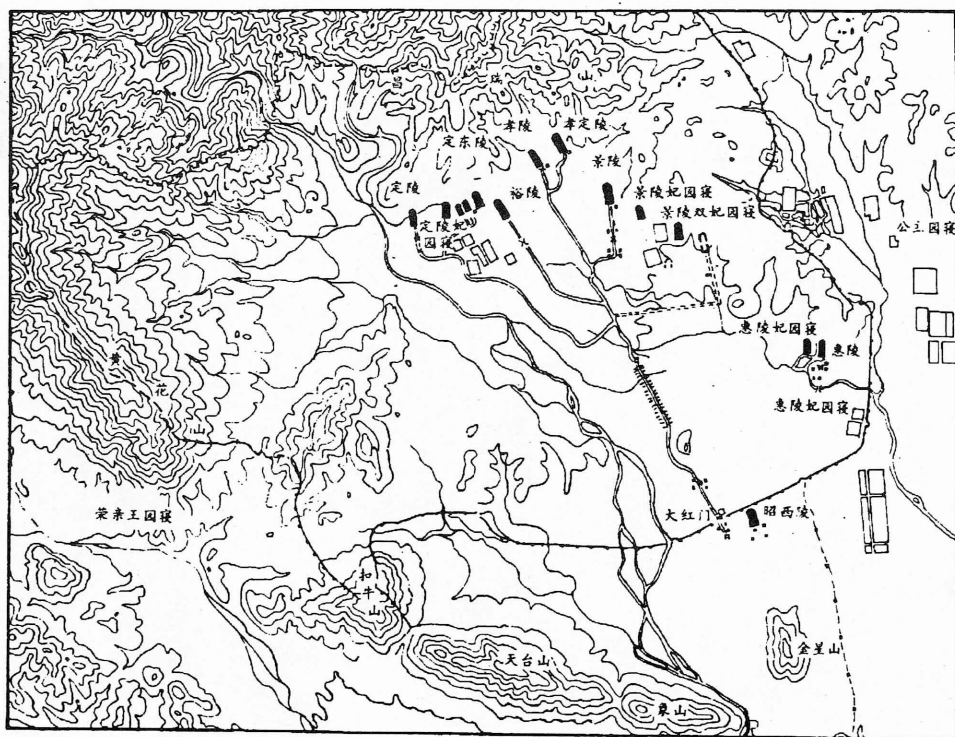


図1 清東陵総平面図 (5)



写真2：湖南省長沙市西方の湘潭県韶山にある毛沢東故居。背山面水の理想的な風水環境にあり、いまは観光地となっている。

は原則三合院、つまりコの字型の民家で、屋敷の背後が山、前面には池があり、集落全体が山懷に抱かれた地景のなかにある。磁石計で屋敷の向きを測ると二〇〇度、つまりわずかに西に偏った南向きの民家だった。

長沙で購入した観光案内書には、こう書かれていた。「一九九一年三月一日、中国共産党中央総書記であり中央軍事委員会主席で

ある江沢民氏が韶山を訪れたとき、故居周囲の美しい山水の風景を見て、郷村の人びとにしみじみとこう語った。『韶山は山青く水清らかで、まったく風水宝地そのものだねえ』……^⑤。

総書記のこの発言を知って、中国人のみならず「風水」とはなにかを知る者ならば、みなこう思うことだろう。「風水宝地」は、まさに風水上の景勝地を指す用語として、その名を堂々と語れる時代がもう蘇っているのだと。

3. 文革期に至るまでの風水師の境遇

風水思想に照らして環境が良いかどうかを判断する専門家のことを、中国では一般に「風水先生」と呼ぶ。その他さまざまな呼称があることは後述することくだが、文語でもさまざまな表現があって、「風水師」とも「陰陽師」とも、あるいは「地理師」とも書いてきた。日本でいう「陰陽師」とは、もともとこのような風水師のことを指していた。中華人民共和国が成立してこのかた、この風水師たちはどのような生活を送っていたのだろうか。文献だけを頼りに中国を紹介してきた日本人学者たちは、一方的に風水思想の死滅を宣告していた^⑥。しかしはたしてそうだったのだろうか。風水師は歴史を通じて、しだいに中国東南部に輩出するようになったという^⑦。

そこでわたしは、中国東南部に赴いて調査してみることにした。上海近郊の農村。そこには風水師たちの過去を語れる二人が健在

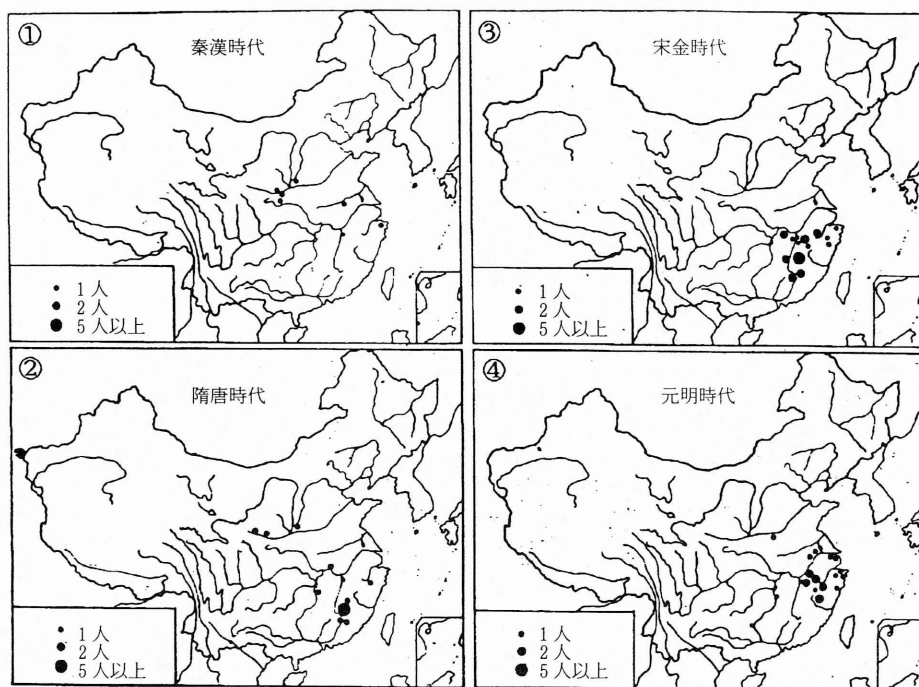


図2 史上名高い風水師の時代別分布図⁽⁹⁾

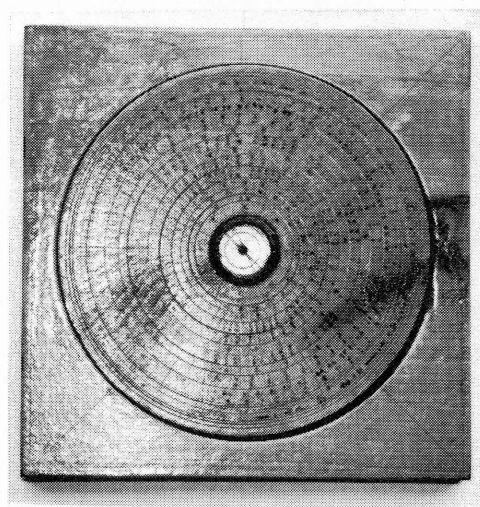


写真3：上海近郊農村で古くから使用されてきた羅盤と同タイプの羅盤。

だった。一人は年齢八四歳のSさん。耳は遠いが、むかしの話を懐かしくわたしに語って聞かせてくれた。Sさんが職業としての「風水先生」になったのは、家業の風水師を受け継ぎ、自分が三代目にあたっていたからだ。共和国建国後も、一般の人びとからずっと風水鑑定依頼があり、文革前まではなおまだ風水を看ることができた。しかし革命の波が上海近郊農村に及ぶや、「破旧立新」（旧習を廃し新秩序を立てる）の名のもとに、風水師の職業は批判にさらされることになる。「風水」は「迷信」だとして、ずっと排斥されてきたからである。¹⁰⁾ Sさんも風水を看ていたために、この時期に批判されて投獄され、家伝の風水書や方位判断に用いる羅盤「写真3」は、すべて没収されてしまった。いまは「改革開放」の時代で

ある。風水判断は黙認されているが、やろうとしても八〇歳を過ぎ
ており、もう歳だ。Sさんの風水師としての時代は、もう過ぎたの
だ。

もう一人は年齢六二歳のJさん。風水師の家系だったわけではな
い。だから自分が一八歳になったときから、風水師について風水を
学んできた。一日勉強すると、先生に米四升を納めて授業料とした。
当時、風水先生とともに野外に出て、そこで実地指導を受けたので
ある。弟子たちが判断した方法にまちがいがなくなると、風水先生
は太鼓判を押してくれて、はれて一人前になれるのだった。一九六
四年まで生産大隊の会計を任されていた。当時は大隊の給料を管理
するほか、依頼があれば風水判断などもしていたので副収入があっ
た。だから収入の豊かなことを怪しまれて、そののち公金横領の嫌
疑がかけられた。同じころ、政治・経済・思想・組織を清めようと
いう「四清運動」の影響がこの地域一带におよび、そのとき批判さ
れてついに羅盤を押収されてしまった。しかし風水書のほうは、そ
の後の文革期を通じ隠し通すことができたという。文革期以後も依
頼があればずっと風水判断をしてきたが、この時期、風水判断をし
ていることは公にできなかった。羅盤を失ったこの時期は、太陽の
方向などを判断して方位を鑑定していた。

最近、ある団体に頼まれて風水判断をしてあげたが、そのとき感
謝されて羅盤を贈られた。風水が良かったので屋敷地を交換して手

に入れた母屋も、息子三人に分割して譲り、いまは別居隠居の身で
ある。だからいま、風水鑑定をして身をたてているわけではない。
ただ知人からの依頼があったときにのみ、判断してやることにして
いるという。良い風水師は信用が第一で、決して広告など出して顧
客を集めたりしない。仕事そのもので評価を受け、信用実績を積み、
その評判で顧客を得るのである。だからといって、アカの他人に依
頼されても決して応じない。風水師と顧客との信頼関係が重要なの
である。

かれら以外にも、また上海地区以外にも、風水について語れる経
験者は現代中国に少なからず健在だ。のちほど述べるように、風水
師という職業さえ復活している。香港や華僑資本など、外国からの
投資が急増している昨今。かれら外国資本家たちがオフィスビルや
工場を建てる際、まず政府に要求することが好風水地の提供である。
好風水地の確保なくしては、中国への投資もむだになる。そのため
だろうか。最近、日本の建設省に相当する中国国家建設部主催の
「中国建築風水理論講習会」が、初の国内各機関向け講習会として
北京で実施された。そのおりわたくしもまた、海外の風水研究を紹
介するよう要請を受け、講師として招かれるはめになった^①。

4. 專業風水師の活躍

ところは福建省のある農村。ここ一帯は高収入の農業地域で景気

がよく、三々四階建ての新しい家屋が林立している。以前の集合住宅で農家らしい農家は、ほとんど見当たらない。「ほんとに農村なのか」と尋ねると、真冬の休耕田を指してたしかに農村だという。しかし農業収入よりも、海外での出稼ぎ収入のほうがはるかに多いという。出稼ぎ先の筆頭は日本、ついで東南アジアである。

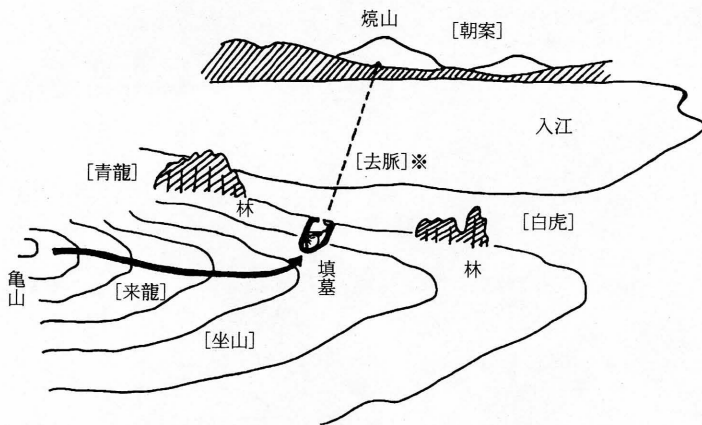
こんな急成長の農村一帯に、専業の風水師がたくさんいるという話を聞いた。ここでは風水師のことを「地理先生」という。いまはどこもかしこも収入が良くて、民家の建築ラッシュが続いている。

風水師は家を新築するときかならず風水判断を依頼されるから、東奔西走、まいにち依頼にに応じていたいへん忙しい。そんな状況下で活躍中の若手二九歳の日さんに、寸暇を割いてもらい風水の話聞いてみた。家は祖父の代から専業風水師で、自分で三代目だという。風水書も羅盤も家伝である。一九歳のときから父について風水術を習ったという。その父親も健在で現役である。

風水は、一般に家屋の新築、家の修理、墓の造営、墓の修復のときに判断するという。中国では歴史上、後述するように都市や村落の建設、道路工事や河川改修などの折りにも風水判断がなされた。しかしそれらは現在では政府の公共事業に属しており、民間の風水師が判断する対象ではない。

風水判断には大別して二つあり、一つは地形判断、もう一つは方位判断である。家や墓を新築したいとき、まずは地形を判断して

「来龍去脈」をみきわめる。「来龍去脈」とは「龍脈」、つまり八気Vの去来する方向を地形から判断することを用いる。龍脈の源は中国西方の崑崙山に発するといふ。福建省には長江（揚子江）南を流れる龍脈が伸び、この地域には玉屏山↓景山↓黄腫山↓上魏山と、山の峰々を経てやってくるのだといふ。墓も家屋も、この龍脈に逆らって造ってはならない。たとえば、図3のように龍脈に乗じて墓を造



※方位: 坐乾向巽兼亥巳一分

図3 墓地風水の判断の一例

る。あとは前後左右の地形が、生氣を貯えるような地形かどうかを判断する。すなわち地形の前後の「坐山・朝案」をみ、地形左右の「青龍・白虎」をみる。墓の背後に墓を安定させる丘が後ろにあるか（坐山）、前面には低地があつて眺望の良い丘があるか（朝案）、左に青龍、右に白虎にあたる地形条件が整っているかどうかをみる。「青龍・白虎」とは、風水書にいう「九星」の条件に見合う地形のことだという。

こうして好地形がえられれば、あとは方位判断である。風水上の好影響を子孫に与えたいならば、墓は良い方角に向けねばならない。そのため死者の生年月日と時間（これを「八字」という）、およびその長男と長孫の「八字」をみる。この一帯の墓は同族墓で、一族を同じ墓に埋葬する。沖繩でいう「門中墓」とほぼ同じである。ただしだからといって、子孫すべての「八字」をみるのではない。女性のみないし、次三男の「八字」のみない。代表者の「八字」をみることによつて、人間それぞれの相性が不幸な方角に合致しないように、墓の方向を定めるのである。避けるべき方向は「八殺」といってこれを避け、良い方向である「財峰、宮峰、印峰、旺峰」などに向けるようにする。羅盤を用いて方位を調べ、その吉凶を風水書で判断する。図3の墓の方向は、「坐乾向巽兼亥巳一分」だった。つまり十干の「乾」を背にして「巽」に向いているが、十二支の「亥」と「巳」の線に向きを少しずらして向けるわけである。方位は、十



写真4：羅盤を用いて、方位の測り方を教えてくれているHさん。

干と十二支の二種を判断するからで、人の運命を左右する「八字」も同じことだという。

こうやってはじめて、良い環境条件のなかに墓を立地させることができる。ただし立地条件が良いだけではだめで、墓を風水上良くしたいなら、墓のあらゆる寸法が「吉寸」に整っていなければならない。高さも幅も、奥行きでもある。それがかつては「魯班尺」で

測って判断していた。「魯班尺」のないいまでも、習慣として吉寸は守っている。台湾では墓と家屋の寸法尺度がちがうが、⁽¹²⁾ここでは同じである。ただし墓と家屋の風水判断は、まったく基準がちがう。それらを習い覚えるのには、たいへんな時間がかかる。習い覚えた風水術を、Hさんは羅盤を携え実際に墓を測ってみせて、連日連夜わたしに教えてくれたが「写真4」、現代中国の勢いを伝えたかったHさんの顔には、もどかしさが残っていた。この日本人に、中国数千年の歴史をもつ風水の奥義が、はたしてほんとうに理解できたんだろうかと。

5. 都城風水の特徴―温州の例―

風水判断には大別して陰宅風水の判断と陽宅風水の判断とがある。⁽¹³⁾

「陰宅」とは祖先の棲み家、すなわち墓地のことであり、「陽宅」とは人間（子孫）の住まいである都市・村落や住宅のことである。現代中国で、それらのすべての風水について話を聞くことができたのは貴重だった。聞いた話の例を、温州でのわたくしの聞き取り例にもとめながら、以下、その特徴について簡単に述べてみたい。

温州で世話を受けたのは、わたくしの北京滞在中に北京で行われた中国民俗学会全国代表大会の席上面識をもつことのできた、民俗学者Yさんとその関係者たちだった。⁽¹⁴⁾ Yさんはわたくしの温州到着の翌日からわたくしのために座談会を用意してくれて、温州の概要

を何人かの老人を交えて聞きただすことができた。わたくしはここで、まず温州の都城風水史ともいべき話をうかがった。

わたくしの要望に応じて話をしてくれたYさんは、話のはじめにこう語った。

「われわれは弁証法に従って、物事を善悪に分けて考えなくてはならない。つまり風水は歴史上迷信であった。「それは物事の悪い側面である。」ただし風水はいま流行しており、それには「なにかしら良い側面としての」理由がある。風水はあきらかに、現代の環境学に貢献しうるものなのだ」と。

この善悪弁証法は、決して正―反―合の弁証法ではなく、むしろ陰陽二元論の言い換えだったことが興味深い。風水もまたかような論法のなかで、いま大陸中国に蘇生しているのだ、とわたくしには思えた。Yさんほか、老人の話はつづく。

「言い伝えによると、温州は古くは甌江の北側に立地していた。しかし風水を看にきた郭璞の判断で、集落を甌江の南に移すことにした。郭璞が温州太守に任じた、西暦三三三年のことだった。集落が河の北側にあると、かならず兵火に遭うというのだ。甌江南側には、北斗七星の形をなす七つの山があった。また別の説によると、その外域の山々を含めて、九つの山があった。地形が北斗七星形なので、温州を別名『斗城』ともいった。風水説に従えば、都市はかならず周辺に山があるような地形のところに造らねばならない、と

というのが郭璞の指示だった。さて昔の温州だが、旧市街の中心部には、温州府と鼓楼とがあった。いまは城壁さえ残っていないが、往時は内城（子城）と外城とがあり、外城の南には、二つの南門があった。水路が周囲をめぐる、南から水路を利用して温州府に入ることでもできた。温州の中心部には、鼓楼（譙楼）がある。清代に修理したものである。なおまた温州には、二十八宿にちなんで、二八の井戸があったという。塔は南の巽吉山に建てられていたが、一九七四年に崩れてしまった。この塔は風水とは無関係だがしかし、この塔があると、文風が盛んになるという言い伝えがある……」。

話を聞きながら、わたくしが復元した図が図4である。この話は、『温州府志』に記載された内容とほぼ同じものだった【図5】。風水で名高い郭璞がこの地の風水を判断したとされ、温州にかぎらずその言い伝えがこの一帯に残されている。『温州府志』によると、郭璞は西北の高峰（郭公山）に登り数峰を見て、これを「北斗」と見立てたという。都城を山の囲みの外に立地させれば、当面は栄えるだろうが、やがて「兵戈水火」にみまわれるだろうと、郭璞は予測した。山を利用して都城と成せば、山が冠のようになって容易には侵入されないし、柄杓（斗）のなかは「安逸」（安楽な生活）が長く保てるだろう、と予測したといわれる。

北斗七星に見立てた山々の一部はいまも温州市内に残っているし、以前の水路も残っているが、図5のような城壁はすでにない。甌江

の中洲にある江心孤嶼は、以前は二つの洲であったが、やがて一つにしてそこに江心寺が建立された。この中洲にある二つの塔も、温州の巽の方角にある巽吉山上にあったという塔も、おそらくは風水上の設備だったろう。風水上の欠を補うために建てる塔を中国では一般に「風水塔」というが、甌江中洲にある二つの塔は、まさにそのような位置にある。また巽吉山にあった塔は、話では風水とは無関係だとされたが、風水上文風を盛んにするために建てる塔を、とくに「文昌塔」と称する。そんな話を、帰国後、いま風水研究を盛んに行っている、大阪大学大学院生の黄永融さんからうかがった。だから塔は、風水上「文風を盛んにする（文昌）」効果があつたかもしれない。このようにみえてみると、温州はまさに典型的な風水都市だったことがわかる。

以上はかつての風水にかかわる伝説だが、こんにちの風水観念はどうなっているのだろうか。聞けば、いまも風水に対する人びとの関心は衰えていないという。たとえば、こんな話がある。

温州市内にある大きなビルの一つ、Bビルの風水が悪いと、ある風水師が判断したことがあるという。なぜならビルの建っている金華方面の道路が長すぎていて、ビルに直接当たってしまうので、殺気が多すぎてビルはこれを防ぎきれないというのだ。そのようにいわれたのち、事実ビルの経営者の何人かが亡くなってしまったとされる。

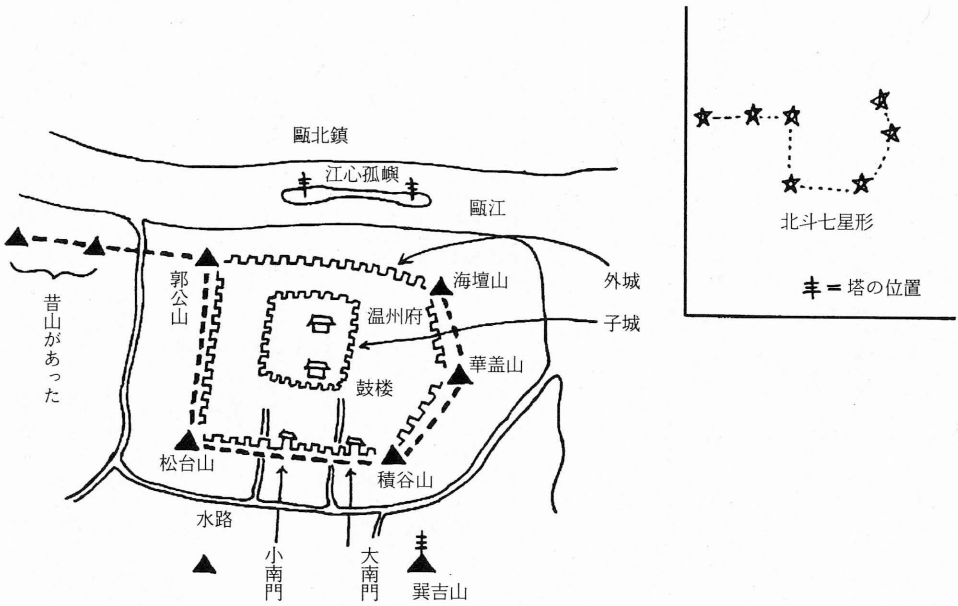


図4 聴取による温州古城理念図

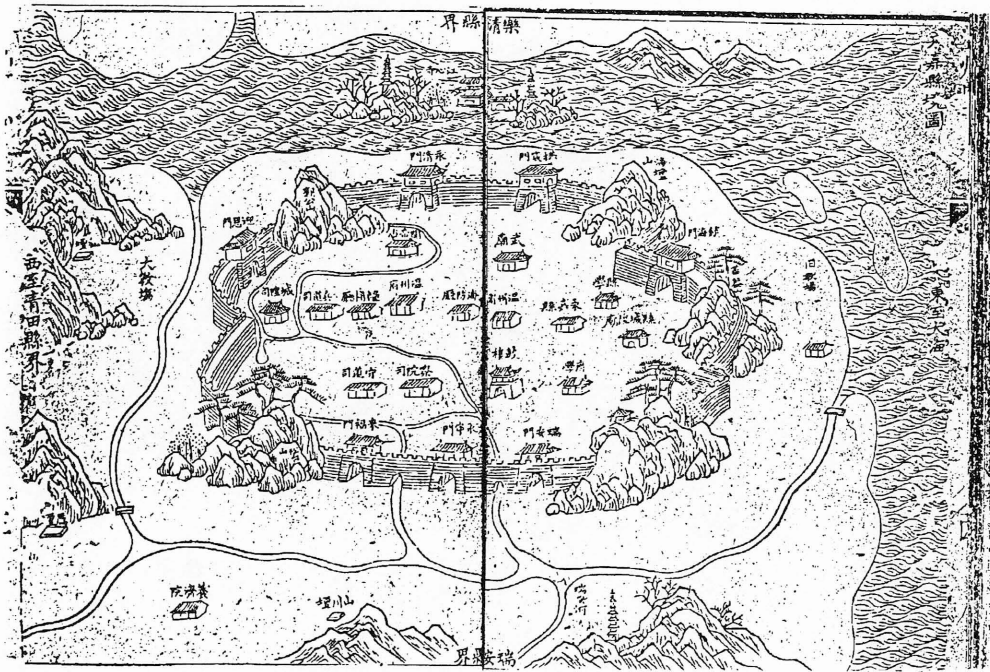


図5 温州古城図(『温州府志』)

こんな話を聞くと、台湾や香港などどこがどうちがうのかわからなくなる。大陸中国の経済発展が進めば、かような話はますます増えてくるにちがいない。科学技術が発展し経済が豊かになれば、風水の観念がなくなっていくのではない。むしろ風水判断は、形を変えディスコースを異にして増長される性質をもっている。

6. 墓地風水の特徴 — 温州の例 —

風水調査はこれからである。わたくしは船に乗り車をチャーターして、寒風吹きすさぶ温州郊外の各地の農村を訪れた。どの集落や農村をとっても風水伝説のあることに驚愕したが、なかでも印象深かったのは、いまだに城壁の残る温州郊外のある農村だった。

われわれの突然の訪問にもかかわらず、快く応対してくれたKさんは、自称「陰陽先生」だった。周易も学んでいるし、暦も執筆して作っている人でもある「写真5」。温州では風水師のことを一般に「陰陽先生」と呼ぶ。わたくしの経験では、温州近郊農村で風水師を「風水先生」と呼ぶところもあったが、すでに述べたように上海近郊農村では「風水先生」、福建省福州では「地理先生」と呼んでいた。さらに湖北省安陸では「道士」と呼んでおり、河北省石家庄の趙県のなかの一つの村落南庄村や内モンゴルのホルチン地方などでは、「南蛮子」と呼んでいるという^①。地方によってこのように風水師は、さまざまな名で呼ばれている。

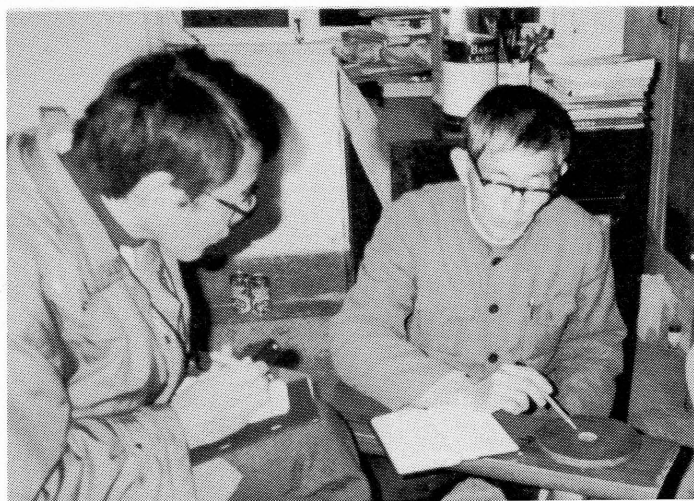


写真5：わたくしの調査風景：風水師に判断法を聴取しているところ（浙江省温州）何彬氏提供。

Kさんの話によると、以前は「一徳二命三風水」といって、徳を第一に考えていた。しかしいまは「一風水二住宅三出好の命運」と称して、第一に風水、第三に子孫の命運を考えるような時代だという。風水はこんにち、きわめて重要な生活知識になっているようである。

なかでも重要なのは「墓地風水」である。そこでまず、墓制をふ

くむ墓地風水の話聞いた。ここ一帯では、死後に棺や墓を死者の家族が造るのではなく、生前に自分で棺を作り、自分で墓を造るのが一般的である。金持ちであれば、自分で棺を作り風水師に看ってもらうて墓を造ることも可能だったが、しかし貧乏人はすぐに墓を造るというわけにはいかなかった。だから多くの人びとは死後、死体を棺に入れてそのままにしておいた。解放前までは「拾骨」（第二次葬）の習慣があった。人が死ぬと館の后堂に棺を置き、次の人が死ぬまでに墓を完成させるのが原則だった。次の人が死ぬと、また后堂に棺を置くのである。その時点でもまだ墓を造る金がないときは、藁小屋を造って死体を仮安置しておいた。その後拾骨して墓を造るのだが、墓を造るには金が相当必要だった。ようやく墓が造れるようになって、一般に風水師を頼めるような金がなかった。そのときは仕方なしに、適当に自分で方向を測って墓を造ったのである。

墓地風水の判断は、方位よりも地形判断が重要である。墓のうしろの地形を見て、まず龍の生死を見る。「死龍」ではだめだ。墓は「活龍」の地形上に造る。つぎに墓前面の地形を見る。前面に平地が開けているのはよいが、なにか「対案」になるものがあるともつとよい。「対案」とは、墓前面にある丘のような障害物である。「対案」のあるべき位置は、年齢序列によって異なっている。ぞくに「左首大房・四房、右首二房・五房、中前三房・六房」という。つ

まり長男（大房）と四男（四房）にとっては左にモノがあり、次男（二房）と五男（五房）にとつては、右にモノがあるとよい。つまり死者との続柄のちがいによって、前面にある「対案」の位置の良さが異なるわけである。墓の形は、地形＝龍の形によって良さがちがうので、だからかならずしもここ一帯に多く見られる椅子状の墳墓、つまり「椅子墳」が良いとはかぎらない。墓を造るには、最初に棺を入れるための砧（温州ではこれを「泥墩」という）を造り、のちに墓の形を造る。墓型は「椅子墳」が最も多いが、それは死者にとつて気持ちがよい墓型だという。「椅子墳」のうしろにある後円を「交椅圈」というが、それも死者の気持ちを良くするための設備だという。石棺墓は、死体が腐敗しやすいように底が土のままになっている。早く死体が腐敗すると、子孫に繁栄をもたらすといわれる。墓は原則として個人だけが葬られるが、親子や夫婦で埋葬された墓もある。世代がちがうと、墓口の段を区別するか、墓のふたを奥に差し込んで世代を区別するよう工夫する。

7. 方位判断と住宅風水の特徴——温州の例——

墓も方位判断は重要だが、羅盤を用いて方位を慎重に判断すべきなのは、むしろ人の住む家屋のほうだ。羅盤のことを、ここではとくに「陰陽盤」という。羅盤で方位を判断する際、とくに注意すべき例をあげてみよう。

まず、子午線に合わせて羅盤の南北を決める。そうしておいて、羅盤で「坐向」を決めるのである。たとえばKさんの家の向きは、「坐艮向坤」（およそ西南向き）である。羅盤の盤上最内円から数えて、四番目に「二十四山向」の判断の欄がある。それで「坐向」を決める。判断は三つある。子午線を「正針」といい、それは「地」であり、ここでも吉凶を見る。中心から八番目の目盛りが「人」である。さらに中心から一〇番目の目盛りを「天」という。まず「正針」で判断して、この家は「坐艮向坤」と判断できる。したがってこの方向は、風水書で吉凶をみると「東南大凶」、「東凶」、「東北小吉」、「北凶」、「南凶」の性質がある。だから大凶の方角には、ゴミやトイレを置くとういことになるという。

つぎに「逢針」で吉凶を判断する。この判断は「人盤定水法吉凶」で、とくに水流の吉凶を読むときに用いる。水法判断だけでも、一般に四八種の判断法がある。たとえば水流判断の例として、「水前面对冲不行、名泪堂水」というのがある。水流が家の前面からやってくるのは、「涙目になる」ので良くないということだ。「左右辺有水道冲不行、冷水冲腰」。左右両側に水流があるのは、腰に冷水をかけるようなもので、これも良くない。「后面有水道冲不行、冷水冲背」。家の後ろに水流があるのは、背中に冷水をかけるようなもので、これも良くない。水は左から右に流れるのがよいし、左から流れるなら二つの部屋が財に富むという。右から左に静水が流れる

のもよい。その静水は湾曲して流れ、しかも細く小さいのがよいと風水書にある。最後に、「中針」で判断する。これは「天盤定天星」といい、二十八宿を読む欄だ。以上は、羅盤による風水判断の一例にすぎない。

方位判断は、「艮坤兼丑未」「乾巽兼戌辰」などと、かならず二つの方位をみるのが原則である。つまり「艮坤」の方位を判断したら、さらに「丑未」の方位も判断しておく。「屋墳不能立正向」といって、家屋や墳墓の向きは正方位に向けるのを避けねばならない。二つの方位を判断すれば、正方向に家や墓を向けずにすむ。ただし廟は「廟宇可立正向」といって、正方位でよい。方位はまた、「凶星可制化」、「二十八宿分五行」、「五行相剋相生」を考えて測る。一つの方位が良くて、次の方位判断で凶となれば、「五行相剋」を考える。「土」の方向で「土」が悪いなら、「木」は「土」に勝つので、木を植えて悪い方位を良くする。「水」の方向で「水」が悪いなら、「水」は「火」に勝つので、たとえば壁を設けて補う。こうした判断が、羅盤による方位判断の特徴である。

方位を判断したあと、館中央の部屋・中堂中央部に「陰陽先生」が「桃符」（四角い杭状の護符）を土間に立てる。「桃符」は家屋風水上の基準点であり、民俗宗教上の魔よけである「写真6」。以下、家屋風水に関しては、たとえば建物のなかのドアは、「青龍」（東）を開け、「白虎」（西）は開けぬようにするなどの配慮をする。「青龍」

は人にとってよい影響があるが、「白虎」は悪い影響がおよぶからだ。

なおとくに家屋風水に関連する殺気除けの装置として、一般に「泰山石敢当」、「屋獅」（屋根獅子）、「影壁」（屏風）、「鏡子」（円鏡）、「八卦牌」などを家屋に飾る民俗が知られる。ここでは風水にかかわる装置であるかどうかともかく、「泰山石敢当」、「影壁」、「鏡子」、「八卦牌」などがみられた。「屋獅」はなかったが、「屋鶏」（屋根雄鶏）が認められた。「米篩」（篩）もまた、魔よけの装置だという。

その他現在でも、ある温州北部の県には風水師がいて密かに風水を看ているといい、奥地のある農村にも一人の風水先生がいた。二

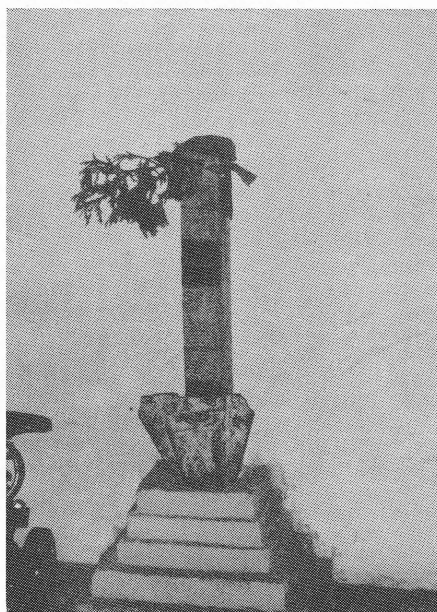


写真6：家屋中央の中堂に設けられた「桃符」。陰陽先生が位置を指定して設置し、道士が呪力のある護符にする。家屋の中心線にある。

四歳のときから風水を看はじめて今年で二四年になるという。昔から風水を看てきた人である。ただし風水判断を専業とするのではなく、雑貨商を営んでいた。こうした話題は、現代中国に決して珍しい話ではない。文革時代を生き抜いた家伝の羅盤も、そこかしこに健在だった。

8. おわりにー大和・沖縄との若干の比較ー

本論を終えるにあたり、大和（日本本土）を加え沖縄との若干の比較を行って、中国・日本双方の風水民俗や風水知識の異同について述べておくことにしたい。¹⁸⁾

古代大和には朝鮮半島の百濟より、当時の最高知識であるさまざまな書物や知識が導入されてきた。『日本書紀』には、「継体天皇」七年（五一三）、夏六月、百濟が、姐彌文貴將軍、州利即爾將軍を遣わし、穗積臣押山（意斯移麻岐彌）に副えて、五経博士「易経・詩経・書経・春秋・礼記に通曉した学者」の段楊爾を貢「上」した¹⁹⁾とある。五経に通曉した学者だった段楊爾が、こんにちに言うところの「風水」知識に通曉した学者だったかどうかは明らかではない。ただし「地理」、すなわち後年一般に「風水」と称されるようになる地理の知識は、そもそも『易経』に記されたものであり、²⁰⁾『易経』の知識を通じてへ地理観察の意義や方法論が、大和に伝えられていたかもしれない。

『日本書紀』の記述は、その後しだいに具体化するようになる。

たとえば、「欽明天皇」十四年(五六三)六月、内臣を百済に遣使した。……別に勅して、『医博士、易博士、曆博士らは、交替で勤務せよ。いま上の「三博士の」種類の人は、まさに交替の年月に当たっている。よろしく帰国の使に付けて交替させなさい。また卜書、曆本、種々の薬物を送付せよ』といった²¹。「地理」、すなわち風水知識に關係する記述は「易博士」が交替勤務で百済に赴き、同時に「卜書」を送付するよう要請されている箇所である。「易博士」が地理を観察できたかもしれないし、「卜書」の一部に地理書＝風水書があったかもしれない。しかしこれだけの記述では、なおまだ詳細は不明である。

「推古天皇十年(六〇二)冬十月、百済の僧觀勒が来た。曆の本、天文地理の書、また遁甲「隱身」方術「陰陽、天文、医療、占ト」の書を貢「上」した。このとき書生三、四人を選び、觀勒について学習させた。陽胡史の祖の玉陳は、曆法を習った。大伴村主高聡は、天文遁甲を学んだ。山背臣日立は、方術を学んだ。みな学んでその業を成「就」した²²。ここにいう「天文地理の書」は、あきらかに後年の中国において風水書として発展した内容を備えていたものだったろう。なおまた風水知識は、こんにちの中国でも「方術」の一種とされており、この世紀初に大和に風水知識がもたらされたことは、かなり確率が高いのではなからうか。かくしてやがて大和

では、同世紀に中国の例にならない藤原京その他の造営が企てられたはずである²³。日本古代にもたらされた地理・風水の知識はまた、中国古代の地理・風水の知識だった。百済からたばびもたらされたであろう風水知識は、その後日本化の一途を遂げ、こんにち東アジアの他の諸国・諸地域と比べても類例のない独特な知識として生かされていくことになる²⁴。

沖縄ではどうだったろうか。沖縄には、閩人三十六姓の渡来(一四世紀末)以降一七世紀までの間に、風水知識が中国からもたらされたことは、すでに多くの指摘がなされている。「尚質王二十年(一六六七)周国俊、已に地理を学ぶ。本国、地理を知る者有るも、得て詳らかにすべからず、是の年、唐榮の周国俊、存留官と為りて閩に入り、已に地理を学びて帰来す²⁵。『球陽』にはこう記録され、同種の記事が『琉球史料叢書』にも認められている。したがって琉球王府編纂の史料では、大和に遅れること一千年前後、少なくとも一七世紀には、中国、ことに閩(福建省)から風水知識が導入されていたこと、これは衆目の一致することなのだが、各家に残されているいくつかの家譜には、周国俊以前の風水知識の活用が記されているとされている。それによるとすでに一六世紀には、風水知識が沖縄に導入されていたらしい²⁷。とすれば中国明朝期に至って、ようやく沖縄に風水知識が伝わったことになる。琉中双方における比較風水史研究は、今後の発展に待つこと大であるが、中国近世に沖縄にも

たらされた風水知識は、同じく中国古代にもたらされた大和の風水知識と、著しく内容を異にすることも、今後知ってしかるべきであろう。それは中国自身の風水知識の変化によるとともに、大和・沖縄双方の文化受容の態勢の差でもあった。

現代中国と大和・沖縄との風水民俗の異同もまた、国家的な歴史の異同によるとともに、日常生活における生活知識の異同にもとづくものだった。それらの地域の民俗の異同、とくに沖縄との異同について若干指摘しつつ、本論を終えようと思う。

日中両地域の民俗を比較してまず気づくことは、大和・沖縄では、すでにあげた上海・温州・福州などの中国の例のような専門の風水師がいないことである。ただしそうはいってもかつての沖縄、そして今後の大和において、専門風水師がいた、あるいは出現することは十分に考えられる。したがって、この二〇世紀末の日常生活にかぎっての話である。沖縄では、易者（サンジンスー）、ユタ、大工などの専職が、近代以来「風水看（フンシミー）」を兼ねてきた。この点は双方の風水知識の差を考えるうえでたいへん重要なのだが、わたくしが調べた主として浙江省一帯の農村でも、他の職を兼ねた風水師がいないわけではなく、決して沖縄が特殊だというわけではない。顕著な特徴といえば、むしろ風水知識そのものの内容にもとめられよう。

「風水」といえば墓のことだとする、大和を除く東アジアで最も

関心のもたれている墓地風水を例としよう。台湾・香港には沖縄と同じような改葬制があり、かつての温州や福州でもまた改葬制があった。つまり洗骨や拾骨を経て骨壺だけがΩ型の恒久的な墓に納められた。この恒久墓を「風水」と呼び、墓の造営にあたって日取り、環境、方位などが考慮されることは沖縄と変わりが無い。しかし台湾や香港はいうにおよばず、大陸中国でも風水上の禍福を支配しているのは、墓そのものよりもむしろ祖先の骨である。沖縄では一般にどうであろうか。沖縄では、墓の風水の善し悪しは骨壺の安葬状態によるのではなく、あくまでも墓そのものである。それは琉中双方の墓制そのもののちがいに由っているであろう。すなわち中国の墓は原則として個人ないし夫婦墓であるのに対して、沖縄では原則として一族やコミュニティの共同墓であることのちがいに由る。しかし中国にも一族の墓がある。それは福州の墓であり、いってみれば「門中墓」だといえる。しかし福州と沖縄との風水判断の目的は骨壺か墓形かのちがいはあきらかです、たんに墓制の差だけに求めがたい。沖縄でいう「フンシマチガニ」（墓の美称）の向きの美しさとは、あくまでも墓形の風水の良さを言っているのである。風水に対する両地域の関心の差、知識の差というわけではない。

また温州や香港などには、風水が原因で墓の争いがあることが報告されている。²⁸ 大きな争いともなると、一族内外の風水闘争として発展してしまうほどである。隣に墓が造られれば、自分の一族

の墓の風水が破壊されてしまう。風水の影響は環境の善し悪しにより、良い環境はきわめて限定されたものだからで、自宅の隣に大きなビルが建てば、日照権問題が生ずるといふ、こんにちの日本の争議を想起すればよい。一族をあげての風水闘争は、こうして良い墓地環境を奪い合うことから生ずるのである。風水の善し悪しは、子孫繁栄の善し悪しを決めるから深刻な争いといふべきである。しかし沖繩にかような風水闘争があったらどうか。この点沖繩は、どうも祖先の位牌の祀りかたに関心が向いており、位牌祭祀なら隣との争いが起こらないことになる。すでに触れたような、温州のビルの風水の話。ビルの風水についても、いたって沖繩は寛容である。石敢当を立てればそれで済むのである。わたくしの知るところ、沖繩ほど石敢当の多い地域はない。

その他中国でいう「羅盤」、沖繩でいう「唐針（カラハイイ）」の使用法、したがって方位判断もまた、双方の地域で著しく異なる。

かつて沖繩でも、中国と同様の羅盤が用いられてきた。しかし以前はともかくとして、現在の沖繩で風水判断する者は、大和で造られているきわめて簡易な方位磁石を用いており、風水の学派ごとにちがう方位判断をしているわけではない。ちがいはさらに、地形判断その他にも及んでいる。それら両地域の風水民俗の異同については、今後さらに比較研究が深まることと思われる。かような比較研究を推し進め、東アジアその他の民俗文化の異同が認識されるために

は、今後さらに大陸中国の民俗文化についての調査が必要不可欠である。本稿は、そのための初歩的な調査研究の一端を紹介したにすぎない。

注

(1) 年度前期（一九九三年四月～一〇月）は東京都の研究助成金を得て、後期（一九九三年一〇月～一九九四年三月）は国際交流基金の研究助成金を得て、前期は首都師範大学を受け入れ機関に、後期は北京师范大学を受け入れ機関として、ほぼ一ヵ月間、調査研究に従事することができた。研究テーマは「大陸中国の、とくに漢族における民間風水と民俗宗教の研究」だった。

(2) 風水以外の調査成果のなかで、最大の収穫は「春節」（正月）行事の調査成果だった。紙幅の関係で、その紹介は別の機会をもちたい。なおその成果の一部は、安陸市の地方紙『安陸報』（一九九四年二月）に掲載されている。

(3) 一部は福田アジオを団長とする文部省科研費調査による。

(4) 宮崎順子 一九九五 「休寧萬安羅盤店訪問記」、何曉昕 一九九〇 『風水探源』〔宮崎順子訳〕『風水探源—中国風水の歴史と実際—』人文書院、二七五～二八二頁

(5) 程建軍・孔尚朴 一九九二 『風水与建築』江西科学技术出版社、三三頁

(6) 江建高・文輝抗・劉斌珍編 一九九二 『韶山導游』湖南地圖出版社、四一頁

(7) 渡邊欣雄 一九九〇 『風水思想と東アジア』 人文書院、二六頁

(8) たとえば牧尾良海「一九八六 「訳者後記」、デ・ホロート著、牧尾良海訳『中国の風水思想—古代地相術のパラドクス—』 第一書房、二六六頁。牧尾が「訳者後記」を綴ったのは一九七七年のこと。まさに中国で文革が終息するころだった。当時は中国に関する情報が十分に伝えられていなかったとはいえ、地方農村でこの時期なお、風水思想は息づいていた。本文中に見るごとくである。中国の表向きの発言に惑わされては、中国理解できないゆえんである。

(9) 程建軍・孔尚朴 一九九一 『前掲書』、一三頁

(10) 「風水」を「迷信」だとする理由は、つぎのような毛沢東の発言に認められる。少々長いが、中国のこんにちの政策にも影響している内容であり、ここに毛沢東発言の要点を掲げておくことにする。

「わたしも村で農民に迷信を打破するように宣伝したことがある。

わたしはこんなふうにした。『生まれたときの八字による運勢を信じて幸運がやってくるのを願い、風水を信じて墓地に生気のたちこめるのを願うというが、ことしの数カ月のあいだに、土豪劣紳や汚職官吏がいっせいに倒れてしまった。まさか数カ月まえまでは、土豪劣紳や汚職官吏はみんな幸運で、墓地にも生気がたちこめていたのに、この数カ月のあいだに、突然全部が悪運にみまわれ、墓地からいっせいに生気が消えたというわけでもあるまい。土豪劣紳は諸君の農会のことをこういうようにいっている。『よくしたもんだ。いまは委員の世の中だよ。どうだい、便所に行っても委員にぶつかる』。たしかにそのとおり。町でも村でも、労働組合でも農会でも、国民党でも共産党でも、一つとして執行委員のいないところはない。たしかに委員の世の中で

ある。だが、これも八字や風水のおかげだろうか。よくしたもんだ！ 村のすかんびんの八字が、いっぺんにみんな良くなった！ 墓地にもいっぺんに生気がたちこめた！ 神さまだって？ それはありがたいものだろう。だが、農民会がなくて、ただ閔帝や観音だけで、土豪劣紳を倒すことができるだろうか。あの閔帝や観音たちも哀れなもので、何百年も拝まれてきながら、諸君のために一人の土豪劣紳だって倒してくれなかった。いま諸君は小作料の引き下げを望んでいるが、諸君はどんな方法でやるのか聞かせてもらいたい。神さまを信じるか、それとも農民会を信じるか。わたしがこう話をしたら、農民はみな笑いだした。」「毛沢東 一九六八 「湖南省農民運動の視察報告（一九二七年三月）」『毛沢東選集』第一巻、外文出版社、五二—五三頁、」

なお、右の文中にある「土豪劣紳」とは、当時の地方の地主階級を代表する政治的代表者で、権力をあやつり裁判権を一手に握っていた者とされる。

(11) 講習会講師になったいきさつについては、渡邊欣雄（一九九三

「中国風水理論講習会で講演して」『沖縄タイムス』朝刊、九月二日

(上)・九月三日(下)に載せた。

(12) 台湾の風水尺度については、渡邊欣雄「一九九四 『風水気の

景観地理学』 人文書院、六二頁ほか」を併せ参照のこと。

(13) 渡邊欣雄 一九九〇 『前掲書』、三六頁

(14) 温州滞在中、わたくしはある地方新聞社のインタビューを受け、視察目的や温州に対する印象について話した。その記事が、地元の新聞『温州僑報』（一九九三年二月）に載せられている。

(15) 明万曆（一五七三—一六一五）『温州府志』影印本による

(16) 渡邊欣雄 一九九五 「中国の風水塔断脈説話について」『東京

都立大学人文学報』二六〇号、一〇一六頁

- (17) 色音 一九九五 『モンゴルの風水民俗』『中国民話の会通信』三六号、一一頁および一二頁

- (18) 東アジア全体と大和・沖縄の風水知識との異同については、すでに述べたことがある「渡邊欣雄 一九九四 『前掲書』、九六〇―一二二頁」。詳しくは拙作を参照されたい。

- (19) 山田宗睦 一九九二 『日本書紀』中巻、教育社、一六二頁

- (20) 高田真治・後藤基巳訳 一九六九 『易経』下巻、二一九頁

- (21) 山田宗睦 一九九二 『前掲書』、二二六頁

- (22) 山田宗睦 一九九二 『前掲書』、二八四頁

- (23) 山田宗睦 一九九二 『前掲書』下巻、二二六―二八頁

- (24) 古代日本に風水知識、当時の中国および日本で呼び称せられていた「相地」や「地理」の知識によって、遷都以前の日本古代都市の地形判断がなされた、ということに対して反論があたりつつある。なおまだ十分な史料を駆使して反論しえた論文をみていない。とくに日本古代史研究者に願いたいのは、中国古代史との比較であり、中国や欧米の研究者たちが一様に認めているところの、中国からの日本への都市造営に関する影響についてである。古代都市研究に関しては、わたくしは素人に等しいので、つとめてご教示を仰ぎたい点である。

- (25) 球陽研究会編 一九七四 『球陽・読み下し編』 角川書店、二〇〇頁

- (26) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編 一九七二 『琉球史料叢書』第一巻、東京美術社、二二九頁

- (27) 平敷令治 一九九五 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房、三八一頁

- (28) 詳しくは、渡邊欣雄「一九九四 『前掲書』、一〇九―一二二頁」

- を参照のこと。
(29) 詳しくは、渡邊欣雄「一九九〇 『前掲書』、七八―八二頁ほか」を参照のこと。